

## 秋山気象 一時的な冬型の危険

3年 原田

- 1989年10月8日 立山連峰 中高年の10人のパーティーの内、8人が疲労凍死
- 2006年10月8日 後立山連峰 7人パーティーの内、4人が疲労凍死(プロガイドによる引率登山) 他、御岳山、前穂高岳などでも遭難が起き、遭難死者は計7名。

□2006年10月6日～実際の天気図



前日の台風から変わった熱帯低気圧が暖湿流を送り込み、前線活発化。

→低気圧や前線の近くで降水。低気圧に吹き込む北寄りの風が強く、関東・東北地方で強い風。



低気圧前面の東北地方で強い北風、雨。

関東から西の太平洋側は徐々に天気回復。

白馬のパーティーはこの日の午後に吹雪に合う。



北海道では大荒れ。

関東以西は乾燥した秋晴れ。

□白馬パーティー遭難の様子

### 「気象判断誤った」ガイドが会見、冬山装備なく

「想像を絶するブリザードだった。気象判断のミスだと思っている」。北アルプス白馬岳で4人が凍死した九州の7人パーティーの1人で、登山ガイドの田上和弘さん(48)は9日、大町署で記者会見し沈痛な表情で遭難を振り返った。入山前日の6日夜、山小屋で見た天気予報からは「低気圧が台風並みに発達するとは判断できなかった」。ヤッケなども冬山に対応できるものではなかったという。7日午前5時10分、小雨の中、富山県の祖母谷(ばばだに)温泉を出発。白馬岳の白馬山荘まで約11時間とみた日程のうち、約9時間余で着いた清水(しょうず)岳まではほぼ予定通り。「余裕もあった」という。雨がみぞれに変わり、午後3時半ごろには猛吹雪に。7人は腕を組み横一列で歩いたが、「腕がちぎれそうだった」。古賀利枝さん、純子さん姉妹は眼鏡が曇り、歩みが遅れる。田上さんを含めた3人と、ほかの4人との距離が開いていった。古賀さん姉妹が進めなくなった。「1人でも担いで小屋に駆け込もう」と、利枝さんを抱き上げようとする、利枝さんは「妹を置いていけん」と拒んだ。取り出したツェルトは強風で飛ばされた。ハイマツのくぼ地に姉妹を入れ、ザックをかぶせた。救助要請のため午後4時半ごろ、その場を離れた。最後に聞いた言葉は「田上さん、ごめんね」だったという。田上さんは「皆さんに非常に迷惑をかけました。ご遺族の方につぐなっていないかといけないと思っている」と話した

□秋の悪天候パターン：一時的な冬型配置

●秋以降は、太平洋側と日本海及び標高の高い山では、天気の変化が異なっている。

#### 夏山

低気圧が近づいてくると雨になり、高気圧が張り出してくれば天気が回復するのは平地でも山岳地帯でも同じ。

#### 九月末以降

標高が高い山では、低気圧が去っても天気が回復しないばかりか、むしろ気温が下がり、風も強くなって雪が降ることが当たり前の世界になる。地上や太平洋側の低い山では、夏の変化と変わりはないが、北アルプスなどでは「高気圧の張り出し=寒気の吹き出し」と考えるべきである。

10月から11月の初めは、冬型になっても一時的で、山岳地帯の天気が荒れるのはせいぜい一日か二日である。装備・食糧の状況によって、待機するか下山するか、的確な判断が必要となる。

□秋の気象遭難多い←秋山で吹雪かれる、疲労凍死の危険がある、という意識が希薄

・紅葉シーズン

・下界では涼しく過ごしやすい季節

→下界と山との季節の差が認識されにくい

○初冠雪とは・・・？

山の頂上付近に雪が積もってふもとから白く見える初めての日のこと。

ふもとから頂上付近が白く見えるのは、すでに数十cmの雪が積もっている場合が多く、そのまま冬山へ移行する場合も多い。

(↓下図：各山岳の初冠雪日)

平均日	山岳名	観測所
10月16日	八甲田山	青森
10月9日	立山	富山
10月13日	白山	金沢
10月1日	富士山	甲府
10月15日	乗鞍岳	松本
10月31日	大山	米子
11月17日	阿蘇高岳	阿蘇山

・降雨、みぞれ、氷雨が降るのは知っていても、実際の装備に生かされない

→レインウェアの防水メンテナンス、防寒用のジャケット・セーターなどが必要

…登山者の精神面が高山の季節の変化に追いつくことができない